



研究部HP 版

第4版 教育研究部 令和2年4月発行

(文責:細井)

～ 「行動」 とは? ～

1 始めに…

「行動」の定義は、心理学の中でも様々な主張があるそうです。ある応用行動分析学で有名な先生は「行動とは、死人にできない活動のことである」と定義されています。これに当てはめて考えると、「静かにしている」「怒らない」「おとなしくしている」などは、死んでいる人でもできるので行動には当たらないそうです。

定義を理解することも大事だとは思いますが、難解になってしまうので先に進みたいと思います。これから二つの「行動」について説明していきます。専門的な用語も出てはまいります、なるべくわかりやすくお伝えできればと思っています。そして、その二つの「行動」の内の一つを利用した学問が「応用行動分析学」だそうです。

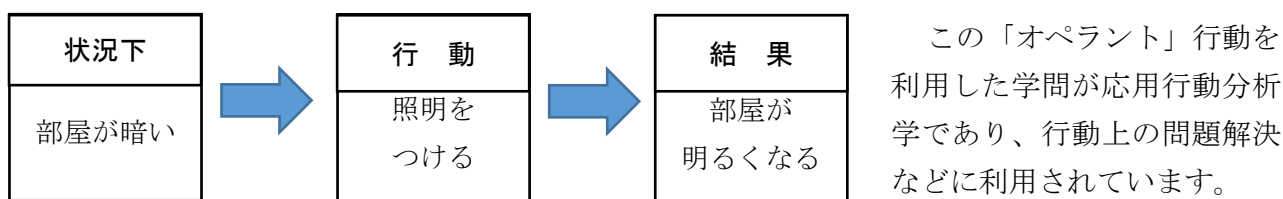
2 レスポンデント行動

桜から新緑を迎える頃となり、これからどんどん暖かくなっていくことでしょう。さて、気温が高くなると皆さんの体には何が起こるのでしょうか？必ず汗をかかれると思います。また、春には突風が吹きものですが、風によって目に塵などが入るとどうなりますか？何も考えずに目を閉じると思います。場合によっては涙も出ることでしょう。これらのような反応のことを「反射」といい、この反射行動を「レスポンデント行動」といいます。反射は、人間が生まれながらに持っているもので、学習する必要のないものでもあります。そして操作することができないものです。この「レスポンデント行動」は、人間の行動でいうと1割程度だそうです。

3 オペラント行動

人間の行動の 9 割ほどを占め、学習された行動であると共に結果事象（行動後の出来事）に影響される行動のことを「オペラント行動」といいます。

具体的にどのような行動が「オペラント行動」なのか、いくつか例を挙げてみます。暗い部屋に入ったときに皆さんはどうしますか？多くの場合は照明をつける（照明のスイッチを押す）と思います。すると部屋が明るくなるという結果が生じます。外出時に雨が降っていたらどうしますか？傘をさしますよね。すると濡れないという結果が生じます。



照明をつけて部屋が明るくなるということは、はっきりと部屋の様子を見ることができるようなど良い結果が生じているわけです。このように、同じ状況下（部屋が暗い）で、良い結果（部屋が明るくなる）が得られると、その行動（照明をつける）をこれからもするように学習します。

C君は先生とお話しすることが大好きでした。ある時ある先生が発した「心配」という言葉を同じように発すると、その先生がいろいろと言をかけてくれました。それ以降C君は、教室でその先生が割と自分の近くにいるとき（状況下）、「心配、心配」「心配する、心配する」（行動）と全く心配がない、もしかしたら心配の言葉の意味もわかってはいないのではないかと思うような笑顔で話しかけ、先生からのいろいろな言葉かけ（結果）を得る機会が増えていった（学習する）のでした。

オペラント行動における、良い結果が生じるため、その行動をこれからもするように学習する（ただし同じ状況下で）ことを「強化」といいます。この「強化」のことは、とても重要な部分であります。次回から詳しくお伝えしていきたいと思います。【5月発行第5版に続く】

引用・参考：PECS トレーニングマニュアル第2版

カット：Pics for PECS 第15版（掲載許諾済み）